

宮浦闘争をめぐる中央委の討論

階級戦線を強化し闘い抜こう！

七〇年安保の先制攻撃

六月十七日の宮浦船長室への機動隊導入と十一名の不当逮捕については、六月二十五日付の「みいけ」号外の通りだが、三池労組は六月十九日、二十日の二日間第十四回中央委員会をひらき、闘いをめぐる情勢分析と方針について討論を行なった。

以下は中央委員会における各委員の具体的な発言と、現状認識の概略である。

現状について

一、今回の機動隊による暴力行為と大量逮捕事件は、いまだに資本と国家権力が一体となつての計画的な組織攻撃であり、七〇年安保を意図しての計画的な先制攻撃であり、戦闘的な組合の弾圧である。したがって、あくまで計画的であり、政治的である。

二、一方、三井鉱山もこの際、三池労組の

団結を破壊し、今後私たちの体制を分析しながら、体制次第では徹底的な追い打ちをかけてくることを必至とする。

三、したがって、現在の闘いを基礎に、今後どのようにして統一闘争を進めるかが基本です。

闘いの基本について

一、会社に対する責任追及と解雇撤回、保安確立の要求の闘いをあくまで継続し、闘いぬく。そのために即時団交の開催を要求し、指導部、現場分会の創意性にもとづく行動を組織します。

二、会社がさらに追い打ちをかけることは、現在までの三井鉱山の態度からして必至です。あくまでも処分を出さざるを得ないための闘いを組みます。

三、当面のCO闘争についても、万田訓練所の廃止、七級の認定、取壊造成などの闘いについて

の行動をおこし、不当弾圧に対する闘いの結

計算された機動隊導入

横にひろげる努力を

宮川組合長「経過については省略しますが、闘いの中にできた問題を提起します。

まず、計画的であった点です。会社は大沢次長が上京し、今回のことについて意思統一をし、荒木国家公安委員長を通じて福岡県警に直接下命をします。

これは六月十六日に県警警備部長が「上から強い指示をうけている。これ以上待つわけにはいかない。おそろしく十七日には出動する」と語り組合の「労資問題であり、あくまでも話し合いで解決したい」といったことに対して「結構だが会社は話し合う意図はないですよ」と語ったことからもうかがえる。

十七日には午前中に大牟田署長から「労資問題の問題に介入したくないが、話し合いをしないならは出る。会社にも話し合うようにいいます」との申入れがあったが、午前十一時半には大沢次長より「今度は交渉に応じません。退るならは応じるが、いまのままで話し合えない」との申入れがあ

合をはかり、発展させます。

四、反合理化＝生命を守る闘いの基本は現場です。したがって現場における闘いを本格的に取り組みます。

このような大綱のうえにたつて、討論が交わされた。

徹底して闘う中から

展望を切りひらけ

増山委員(宮浦)の意見「四月二十八日に江上・井上両君が出動停止をうけていろいろ分會ではつぎのようによい意志統一してきた。

一、保安に対して妥協はしない。

二、保安闘争を組む三池労組に徹底した処分がきても、あくまでも闘い抜く。

三、闘いを強力にする中でZD運動を打ち出す。

この確認のもとで五月二十六日三名の解雇

り、ほぼ同じころ県警機動隊は出動を決定しました。

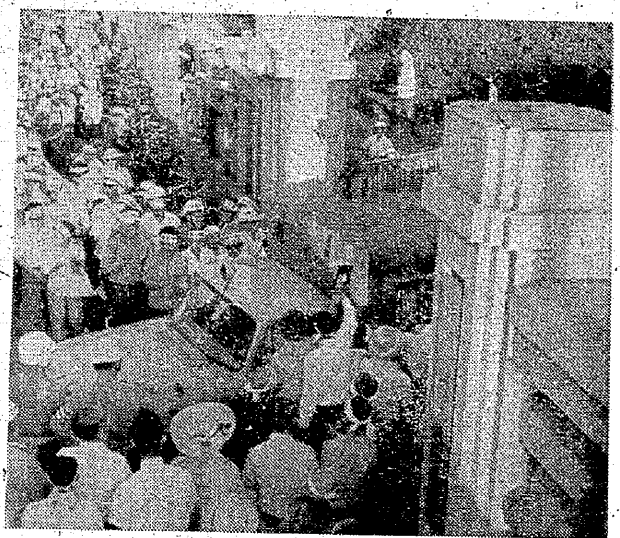
三池労組は直ちに緊急動員を指令し、全組合員は船長室周辺に座り込み、不当な権力の介入に抗議しました。

このようにして、大量逮捕という大弾圧は計画されたわけですが、この中から三つの問題が出てきます。

一、この大弾圧は、はっきりと三池労組をつぶすために用意されたものであり、引いても進んでも大量逮捕はまぬがれなかったであろう。

二、警備隊長がわれわれの抗議に「全員逮捕できたのに、しほっただけ」と答えていること、われわれの体制しだいは追い打ちがかけられるであろう。

三、したがって、今後どのような統一闘争をするのか、三池内部の意志統一とどう横の闘いの連携をふかめるかがもっとも重要である。



裁判所の内外を埋めて待つていと、やがて警察の護送車が獄中の仲間を運んできた。元気な表情に、思わず湧きあがる大かん声……

(太牟田の裁判所で、拘留開示理由公判の日のこと)

自発性と指導性

民本委員(本所)の意見「組合員の率直な意見をいいたい。組合員の自発性、創意性は尊重しなければならぬ。しかし、その中で指導性が十二分に発揮されなければならぬ。組合員は「指導性は徹底している」といっているが、組合は組合員にもっと指導性を徹底し、責任の所在を明らかにすべきだ。いまの情勢では犠牲をもっと少なくし、効果は最大にあげねばならぬ。何らかの方法で逮捕というのを回避する方法を考へるべきではなかったか。自発性、創意性が一人歩きしているようだ。

闘いの成果はひろがりに

原田委員(四山)の意見「私の分会では六月九日の動員が少なかったことを反省し、組合員をひらき、「これ以上の犠牲者を出さないために分会の一人ひとりが二四ノストを打ってくれ」と執行部に要請するほどの決意を固めよう」といふことを意志統一した。

あらゆる行動をつみ上げよう

川口委員(宮浦)の意見「われわれは船長室から出されたが、これは敗北を意味するものではなく、勝利への道だ。その後のデモにおいても、三池労組全体が怒りにもえ、かつてないものであった。組合員一人ひとりは闘うエネルギーをもっており、それをいかに結集するかが問題だ。そのエネルギーを、いまの時点でもっと引き出さなければ、勝利感が敗北感にかわる。

宮浦の闘いが本場に三池一本の闘いになれたし、逮捕者がいるかぎり中途半端な戦力は出来な

(次ページ上段へつづく)

たとえ手錠ははめられていても……

(暖い激励に、護送車の中から思わず「うっ」)

